

佳作

「テオ」からの贈り物

秋田県横手市立横手南中学校

3年 佐藤 世渚

「テオ」この名前を覚えているだろうか。忘れるはずもないだろう。テオと出会ったあの瞬間を僕は今でも鮮明に覚えている。

ある日の夜のこと。母のスマホからラインの通知音が鳴った。母はスマホ画面をじっと見ている。「えっ！」母が驚いた。僕もスマホ画面をのぞいた。僕も驚いた。知り合いが子猫を1匹拾ったらしい。僕たち家族は猫好きだったため、家族全員引き取ることを決め、急いで知り合いの家に向かった。みんなワクワクが止まらない。家に着き玄関のドアを開くと、1匹の小さく可愛らしい子猫が僕の目に飛び込んできた。思ったよりも小さかった。子猫が拾われたときの様子を詳しく聞いてから、僕は子猫を抱いて帰宅した。帰宅後、僕は汚れた子猫の体を軽く拭いてあげた。小さく、微かに聞こえる子猫の泣き声を聞くだけで幸福感でいっぱいになった。

次の日、家族と子猫の名前の話し合いをした。たくさん候補があがったが、最終的には「テオ」という名前にした。名前の由来は「神の贈り物」。ギリシャ語で「テオドロス」。その二文字をとって「テオ」と名付けた。

テオはとても活発な性格だった。僕は学校から帰ると、まずテオと遊ぶのが日課になった。家族もみんな同じだった。カーテンに飛び乗ったテオに慌てたこともあった。おしっこを決まった場所にできずに掃除する日が続いたが、できるようになったときはテオの成長を感じてみんなで喜び合った。テオは僕たち家族に思い出の引き出しを増やしてくれた。

テオが家族になって1年くらいたったある日のこと、テオが珍しく体調を崩した。カーテンの後ろでじっと静かに座っている。ご飯も大好きなおやつも全く食べない。父は慌てて動物病院に連れて行った。「どうか無事であってくれ！」僕たち家族はそう願った。

次の日、僕は学校の部活動から帰ると、父の口から信じられない言葉がでてきた。「テオ、亡くなっちゃいました……。」それを聞いた途端、涙がとまらなくなった。「もう少し、遊んであげればよかった……。」

次の日から、家の中は静かだった。聞こえるはずの、テオの声が聞こえない。思い出すたびに、涙があふれた。家族の話題と笑顔も一つずつ減ってしまった。でも、出会いがあれば、別れがあるのも当然だ。そう考えれば少し気持ちが軽くなる。今の僕は、テオと再び会えることを期待している。いつかテオが会い

に来てくれる気がしてならない。

「テオ」。その名の通り、テオは僕たちに出会いをプレゼントしてくれた。また、家族を迎える喜びを知った。テオの成長から、愛情や慈しみの感情を味わうことができた。そして、テオがいなくなって、家族を失う深い悲しみや喪失感を感じさせられた。振り返ってみると、僕の心が大きく揺さぶられたこれらの感情は、テオがいたから感じることもできたものだった。まさに「神の贈り物」。

今、世の中はペットブームだという。でも、動物を虐待してしまう人や、安易な考えでペットを途中で手放す人が多くいると聞く。捨てられたり、迷子になったりしたペットたちは動物愛護センターなどに保護され、一定期間はシェルターの中で飼い主の迎えを待つそうだが、期間が過ぎても飼い主が現れなかった動物たちは、殺処分という運命をたどることになるという。ペットを手放すにはさまざまな事情があると思うが、中には「自分の想像以上に大きくなった」「繁殖して数が多くなり、これ以上飼育するのは困難だ」などの理由を目にすると、とても心が痛む。安易な考えのために、小さな動物たちが命を落とす運命をたどるのは残念でならない。

ペットも命ある生き物だ。当然成長すれば年齢も重ねるし、いつかは死が訪れる。僕は改めて、動物を飼う上で必要な条件というものを調べてみた。住宅がペットを飼える状況にあること。引っ越しや転勤等でも継続飼育する覚悟があること。高齢になったペットの介護をする心構えがあること。動物をペットとして飼うことは決して簡単なことではない。このことを念頭に置いてペットを家族の一員として迎え入れてほしいと強く思う。また、それでも飼えなくなった場合に備えて、代わりに飼ってくれる人を見つけておくことも必要なことだと思う。そして、僕は将来、一つでも多くの小さな命を、みんなで守っていきける世の中をつくっていきたい。

最後に、未来の僕へ。もしもテオが会いに来てくれたら、笑顔いっぱいテオを迎えてほしい。たとえテオが猫の姿じゃなくても、気付いてあげてほしい。そして時間の許す限り愛情をいっぱい注いでほしい。テオからたくさんの贈り物もらった分、しっかりとお返しをするんだ。今の僕はまたテオと再会できる日をずっと楽しみにしているから。